

講演 1

「中国における流通国際化の進展について」

中国市場学会理事長・中国人民大学

教授 高 鉄 生 氏

まず、中村学園大学50周年の記念イベントで、福岡に来られたことを嬉しく思います。私は中国市場学会、それから中国人民大学の代表として、今回のわれわれに対する盛大な招待に対して、お祝いと協力のお礼を申し上げます。

これから、中国の国際流通について、簡単な振り返りと展望を述べさせていただきたいと思っています。

先ほど、ご紹介にありましたように、私は学者から経験して、官僚、また企業のトップ、また大学に戻ったという経緯がありますので、なかなか学者的なまとめができない部分があるかもしれませんが、簡単なまとめをさせていただきたいと思っています。

新しい世紀に入ってから、中国の世界における貿易の全体の量、市場が非常に増加しております。中国の国際貿易関係の問題も世界的に注目される一つの原因だと思います。

中国流通国際化については、いくつかの角度で見ることができます。例えば、企業レベルの分析、あるいは国家レベルの分析という方法もあると思いますが、今日の講演は、いわゆる後者、国家レベルの分析についてお話をさせていただきます。

まず、話の第1部は、中国における流通国際化の問題の範疇です。この研究の範囲としては、それぞれの国と地域が異なるところはありますが、中国の過程に関しては、二つの転換がございます。一つは計画経済から市場経済への転換。もう一つは、閉鎖的な経済から開放的な経済へ

の転換です。この二つの重要な転換がございますので、いくつかの重要な関係と問題について、研究をする必要があります。これから示す問題は、こういったものになります。

1番目は、中央政府が国内市場と海外市場に対する認識と、関連する政策です。2番目は、国内取引と海外貿易に関する措置、対処方法です。3番目は、外資企業の投資、それから国内流通企業に関する海外進出に関する政策です。

4番目は、輸出入に関する政策です。主に、対外の貿易の依存度に対する把握関係です。

中国の国内に関しては、自由貿易実験区に関する問題。それから対外的には自由貿易協定の政策、その変化の問題です。

中国が今、訴えているのが一帯一路という政策です。一帯は「シルクロード経済ベルト」、一路は「21世紀海上シルクロード」です。

8番目は、国際流通主体に関する認識度、政策関係です。9番目は、国際流通分野の協力の認識と政策です。

話の第2部。中国の流通の国際化は、この改革開放によって生まれる必然的な産物だと思います。また、改革開放は、計画経済の一部の否定、それから揚棄というものでもあります。この改革開放は、流通において、海外に向けて進出する、重要な基礎となっており、よって流通の再建は、改革からスタートしたといってもいいものです。ですから、流通分野に関しては、改革開放は先導的な政策、キャンペーンだと思っています。

中国の流通の国際化に関しては、2種類の重要な原動力があります。一つは、いわゆる国内外の2種類の資源を利用すること、堅持する政策です。もう一つは、国内外の2大市場を利用するという考えです。

グローバリゼーションに合流することは、中国が堅持しなければならないことです。グローバリゼーションに合流するということは、中国にとっても貿易の環境の改善にもつながるし、グローバリゼーションのオーナスを共有することができます。

もう一つは、中国にとっては、このグローバリゼーションへの合流は、中国国内の今までの各種の制度に対して、重要な点検作業、あるいは外部の流通機能も働いて、一つの新しいシステムの再建のチャンスにもなっています。

第3部は、中国国際流通化の三つの段階についてお話します。この問題に関しては、いろんな認識がありますが、例えば、中国の流通の現段階の区切りは、いわゆる対外開放とイコールとする考え方。あるいは、国際流通化の段階は、外資の交流が中国に進出した段階と同じようにするというものもあります。

私は、三つの段階という分け方をしております。基本的には、中国のWTO加盟を境に、前の15年間と、加盟後の15年間、合わせて30年間を二つの段階に分ける。第3の段階は、2014年、中国が新常态、いわゆるニューノーマルの常態に入ったと宣言した時代から。今後の長い期間は、第3の期間だと考えています。

ニューノーマルについては、ご存じない方もいらっしゃるかもしれないので、簡単に説明します。これは習近平主席が、2014年に中国の河北省を視察したときに宣言したものです。いわゆる中国の経済は今後、高度成長の時代から、中速度成長という時代に入るのが特徴です。もう一つは、いわゆる希望的な拡張から、構造的な変換に変わるというものです。そしていろんな要素の変換から、新しいものを創出する段階

に変わると宣言しています。

この第3部は、ニューノーマルの段階に入ってからという分け方をしたことについて説明いたします。4つの理由がございます。まず、2014年に入って以降、中国はWTO加盟後のボーナスをほとんど使い果たしました。次に、2008年以降の国際金融危機以降は、中国の対外的な貿易の単純拡張が、むしろピークに達している。今後は減っていくと。貿易による単純な原因作用というのは持続できないということです。3つ目は、中国の対外開放の新しい局面が見えてきたということが言えます。4つ目は、中国では、インターネットプラスという新しい言い方をしていますが、いわゆるインターネットによる中国の流通にとって、新たなチャンスとチャレンジが出てくるのではないかと。そういった中国の国際流通化に必要なチャンスと、いろんな競争も出てくるわけですから、このように私は分けました。

この新しい段階においては、いくつかの顕著な変化が現れてくると思います。1つは、中国の経済高度の転換によって、消費構造の変化、それから対外貿易の変化です。対外貿易に関しては、成長速度と全体の規模の拡大から、今後は数量と品質、速度と利益、規模と水準、レベルが、同時に重視するような段階になると思います。次に、中国の国際産業の移転の流れの中での地位の変化です。中国はすでに、労働力のコスト、土地の資源などの面では、すでに優位性がなくなっております。そこで中国では「中国製造2025」というプロジェクトが作成されており、今後は産業構造のレベルアップを目指していくところです。一部の労働集約型の産業は、中国の内陸部の西部、海外に移転させ、また先進国の最高評価というプロセスの中で、一部の製造業はさらに中国に導入するというような過程が、むしろ、今後の中国にとってはふさわしい政策だと思います。3つ目は、eコマース、いわゆる電子商取引の部分です。eコマースに

対しては、中国の流通の分野全体に浸透していき、発展の勢いが非常にめざましい。越境電子商取引の部分に対しては、特にそうです。従来の中国の国内取引、貿易の様相を変える勢いです。今後、こういった電子商取引によって、国内取引と海外取引の推進が一層、早くなると思います。そして最後に、先ほど言った、いろんな影響を受けての中国の小売り業態の矯正。かなり影響を受けまして、今後はむしろ、顧客が体験できるショッピング施設を、大都市から中小都市へどんどんシフトしていく傾向が見られると思います。

さて、これから、第4部の話に入りたいと思います。中国における流通国際化の展望についてです。まず、2026年の中国のGDPの総額は、アメリカを超えると予測されています。そして2050年には、中国はもう中等先進国のレベルに達すると言われていています。これは何を意味するかというと、中国は世界最大の市場になるということです。第2に、中国の海外進出と、また外資の中国の進出という、この2本の発展がさらに多くなるということです。中国全体のGDPのパイが急速に増加しております。これまでの高速成長が、もうすでに規模がある程度できていますので、今後はむしろ、輸出より輸入の大幅な成長が見込まれます。これから中国は、「製造大国」「輸出大国」から、「輸入大国」「消費大国」へと変わると思います。第3に、中国にはこれから、日本の総合商社のような、あるいは一部、欧米の大型流通企業のような、国際的な商業主体が現れてくる可能性があります。第4に、これから流通の国際化は、実態店舗、実態業態のドッキング、いわゆる接続だけではなく、バーチャルネットワークの接続もどんどん出てくると思います。越境電子商取引は、今後の中国の流通国際化の重要なキャリアになっていくと思います。ついでに申し上げますと、今後、こういうことが本当に実現すれば、福岡を訪れる中国の観光客は、もっと観光に専念し

て、買い物というよりは、本来の観光に戻るのではないかと思いますし、その時代になれば、おそらくショッピングはネットですることになるのではないかと思います。

最後の問題についてお話しします。中国の流通国際化が明らかにしたものについてです。まず、改革開放は、中国国際流通化の原動力であるということです。改革開放は、流通のグローバル化の重要な基礎条件になっていると思います。次に、流通のグローバル化は、おそらく全ての国、地域にとっても、プラス方向の開放経済になると思います。これは一種のボーナスになると思います。ただし、このボーナスは一定の歴史の時期、あるいは、この段階においては、全ての地域、国家にとっては同じように居住することができないと思われる。この問題に関して解決する方法としては、国際的協調、非貿易保護主義が重要だと思います。3番目は、経験から見れば、流通の国際化と流通の現代化は、お互いに影響するし、因果関係になっていると思われます。この国際化に関しては、新しい工業革命、産業革命、情報革命とともに、チャンスをつかむ必要があります。4番目は、この国際化は良好な政治環境が必要です。いわゆる、いろんな政治的な干渉を排除しなければいけないし、イデオロギーの問題に関しては、外して考える必要があります。

流通の国際化は、重要な理論の指示、サポートが必要です。流通理論に関しては、経済学の主流の分野からこれまでは外されてきました。流通の国際化は、簡単に、単純に国際貿易理論とか、あるいは多国籍企業のマーケティング理論に片付けられていた点もあると思いますが、これは非多角的で合理ではありません。これから先は、新たな理論、新たな展開・説明が必要です。協力的な、多角的な理論を、この流通国際化を支えていくことになると思いますので、そういった理論の研究が必要だと思います。

中国にとっては、これからの先の流通の国際

化は、まだいろんな変化、あるいはハブニングも出てくるだろうと思います。ある日、朝起きたら皆さんにとっての流通の国際化とは、もう空港に行き、飛行機に乗って、海外のリゾート地、あるいはショッピングに行くことではなく、すでに、あなたのいる場所が海外の目的地になるかもしれないし、国際化とローカル化は区別がつかなくなる時代が来ると思います。なので、いろんな理論の政策の修正、訂正、教科書の修正、いろんな変化が出てくるだろうと思います。

もし将来、再びお招きをいただきまして、福岡に来る機会があれば、話の内容はかなり変わってくるだろうと思います。

ご清聴ありがとうございます。

(講演 I : 終了)

○高 ご質問があれば、ぜひ、していただきたいと思います。

○会場 1 今、先生がおっしゃっていた2026年にアメリカを凌駕するというのですが、ということは、アメリカ的な資本主義ののっとなって経済が成長するということになるんですか。それでは、共産主義から資本主義の極端に行く、格差が広がるということになると思うんです。それをもっと共産主義の見直しはないんだろうか。例えば、共産主義のいいところをとって、資本主義のいいところをとって、自由に物が言えると。そういうふうにならないんでしょうか。単に2026年にアメリカを経済的に凌駕するだけではなくて、共産主義にもいいところがあるじゃないかと、このようにはならないんでしょうか。

○高 今おっしゃった問題ですが、非常に複雑な問題だと思います。経済だけではなく、一部の政治的な要素も絡んでいますけれども、あくまでも個人的にはこのように申し上げたいと思います。

中国では、経済の発展の部分に関しては、実は先ほど申し上げました2026年のアメリカを超える部分に対して、GDPの総量は超えると思

います。ただ、ご存じのように、中国はこれまでも中国自身の中国的社会主義市場経済という視点で運営して、ここまで大きな成功を収めております。

ただし、最近は落ち着いてきて、例えば、今年は7%の成長率で、来年は6%になるかもしれない。再来年は5%だろうと。そういう予測で、中国政府ではなくて、今の2026年は、一部の機関の中の予測で、中国は超えるだろうということです。

実は、中国の経済のGDPの数字よりは、全体のシステム的な超えることをおそらく考えられると思います。なので、実を言うと、購買力のレベルでいうと、一部の世界の機関では、すでに中国はアメリカを超えているという予測も出ています。この問題に関しては、今後の発展に、われわれも注意して見る必要があると思います。

○司会 ほかは、いかがでしょうか。

○会場 2 今、TPPが進行中です。見方によっては、TPPに参加していない中国を最も意識した経済ブロック圏が作られているというような見方がございますけれども、先生は、この日米が主導しているTPPの動きについて、どう見方をされておられますか。

○高 この問題に関しては、このように考えております。

いわゆるこのTPPの問題は、おそらく中国政府も非常に興味を持っていると思います。それより日本の政府、国民が、最も興味を持っている出来事だと思います。

つまり、グローバリゼーション、それから流通のグローバリゼーション、グローバル化に関しては、まずわれわれの基本はWTOのフレームワークの中で、いろんな問題が出てくるんですが、解決していくことが重要だと思います。

アメリカや一部の地域から、TPPのような枠組みを提出されて、例えば、日米や一部の国、あるいは最近ではEUとの構想も出てきています

が、この一部のメンバーがつくるものが、本当に皆さんの利益につながるだろうか。日本がわざと中国を外して、中国を不在の状態にしてできる枠組みは、おそらく皆さんの利益につながらないだろうと思います。なので、これは一部政治的な思惑もあるかもしれないですけども、中国排除の部分は、中国政府としては当然、認めないだろうと思うし、実は、誘われれば、中国は参加する用意はあるのではないのでしょうか。もっと言うと、経済の政治的な干渉問題は先ほども申し上げましたように、これはあってはいけないことです。なので、TPP以外に、中国ももう一つのグループをつくってするというのも、実は、これも私は個人的にはよくないのではないかと考えております。さっきの講演の中

でも申し上げた貿易保護主義の台頭が実は問題なのです。なので、年配の方はご存じだと思いますけれども、昔、中国、ソ連のグループと、アメリカ中心のグループ、2大市場をつくった時代がありました。この2大市場の時代がもう一度、戻ってくるということはあってはならないのです。

皆さんの全員がプレーヤー、全員の利益につながるような枠組みの中で協調してやることが、やはり重要ではないかなと思います。よろしいでしょうか。

○会場2 ありがとうございます。

○司会 では、高先生に、いま一度、大きな拍手をお送りください。ありがとうございます。

(終了)